

一八八四年十月一日(水)

聖ラーマクリシユナ、アダルの家を訪問して信者たちとキールタンを楽しむ

聖ラーマクリシユナ、ヴィジヤイ、ケダル、バブラームなどの信者と共に

〔ケダル、ヴィジヤイ、バブラーム、ナラン、校長、ヴァイシユナヴァ・チャラン〕

今日はアツシン月、白分十一日。キリスト暦一八八四年十月一日、水曜日。タクールヒツキキリシヨルは南神村から

アダルの家へいらつしやるところである。お供はナランとガンガーダル。途中でタクールは突然、前三昧状態になられて、こんなことをおつしやる——「わたしが数珠を繰ジャバって称名するつて？　チツ、

恥ずかしい！　このシヴァ(訳注)(聖ラーマクリシユナご自身のこと)は洞穴のシヴァだ。大地から自然に湧き出たシヴァ(訳注)の像だ！」

アダルの家に着いた。ここには大勢の信者たちが集まっていた。ケダルも、ヴィジヤイも、バブラームも、その他大勢来ている。キールタン歌手のヴァイシユナヴァ・チャランも来ている。タクルの言い付けで、アダルは毎日オフィスから帰宅すると、ヴァイシユナヴァ・チャランのキールタンを聞いているのである。ヴァイシユナヴァ・チャランのキールタンは非常に甘く美しい。今日もサンキー

ルタンが行われることになっている。タクールは、アダル家の応接間にお入りになった。信者たちは一様に起立し、タクールの御足にぬかずいて拝した。タクールがニコニコしながら席にお着きになった後で、一同も腰を下ろした。ケダルとヴィジャイがタクールに礼フラナムをすると、タクールはナランとバブラームに向かつて、この兩人に礼フラナムをするようにとおっしゃった。そして、「あなた方、この若者二人が信仰を得られるように祝福してやっておくれ」とおっしゃった。ナランの方を見て、「この子は大そう素直でね」と言われたので、信者たちはみな若者二人の方に目を向けている。(訳註、サンキールタン——神を讃美した歌をうたうことをキールタンと言うが、多くの人が集まって行う場合はサンキールタンとも言ふ)

聖ラーマクリシュナ「(ケダルたち信者に)お前たち、ここで会えてよかったね——そうでなかりや、お前たちはみんなでカーリー殿に行ってしまったらう。神さまの思召しでここで会えたんだよ」

ケダル「(うやうやしく合掌して) 神の思召しは——つまりそれはあなた様の思召しでございます」

タクールはお笑いになった。

(訳註1) インドには神ご自身が姿を表されたとされる自然に出来たリンガ(シヴァ神を象徴する像)が十二あり、ジョーティ・リンガ(光の像)と呼ばれ、多くの巡礼者が集まる。アマルナートの洞窟内に出来た数メートルにもなる水のリンガは特に有名で、一八九七年七月末にヴィヴェーカーナンダとその弟子シスター・ニヴェディターも訪れている。

## 信者たちと楽しいキールタン

やがて、キールタンがはじまった。ヴァイシユナヴァ・チャランはクリシユナとラーダーの遊戯リイラの愛の語りから始まって、ラーサ・リーラー(訳註2)(ゴビーたちとの愛の遊戯)の歌をうたった。ラーダー、クリシユナの合体の歌がはじまると、タクルは嬉しくてたまらないように踊りはじめられた。信者もいっしょになって、タクルの周囲をまわりながら歌い踊った。終わると皆は席についた。

聖ラーマクリシユナ「(ヴィジャイに)——この人(ヴァイシユナヴァ・チャラン)はほんとうまいね！」とおっしゃって、ヴァイシユナヴァ・チャランの方を向き、美しき聖ガウランガの歌をうたっておくれとおっしゃった。ヴァイシユナヴァ・チャランはそれを歌いはじめた——

聖ガウランガは美しく

新しき偉大な踊り手

燃え上がる黄金こがねのような

あの肌の色——

歌が終わると、タクルはヴィジャイに、「どうだい？」とお聞きになった。ヴィジャイ——「すばらしいですね」タクルは、ご自分がガウランガの気分になって一つ歌われた。

バーヴァに笑い、泣き、踊り、歌い  
森を見てはプリンダーヴァンと思い

海を見てはヤムナーの流れと思う

内奥うちはクリシュナ、外面そとはガウル

ゴラは声をあげて泣き

ゴラは自分の足にとりすがり

何処いずこ? 愛に満ちたラーダーは――

モニもいっしょに歌っている。

タクルの歌が終わると、ヴァイシュナヴァ・チャランが再び歌う――

さあ、ヴィーナ(笛)に合わせて

(訳註2) ラーサ・リーラー――クリシュナと長らく別離していたゴビーたちはフルミ満月の夜にクリシュナと愛のダンスを踊る。クリシュナがゴビーたちの首に腕を回してダンスを踊ったとき、ゴビーたちはクリシュナを独占したと思ったが、クリシュナはゴビーの数だけお姿を表され、ゴビーたちとのダンスは大きな輪となった。

ゴラ――ガウル||チャイタニヤのこと

ハリ、ハリと称えよう！

めでたいハリの御足に祝福されなくては

どうして至上の真理をさとることができよう

ハリの名に悲しみは消え去り

口からほとばしるハレ、クリシュナ、ハレ

ハリのお恵みがありさえすれば

もう何の心配も苦しみもありはせぬ

ヴィーナに合わせて

さあ、ハリの名を称えよう

ハリの名なくては

地上の宝は空しいもの

僕 しもべ ゴーヴィンダは

こういつて嘆いた――

果てない海を泳ぎ渡ろうとして

ハリ――クリシュナ

どんなに多くの日々を空しくもがいたことか。

タクールは歌い手といっしょに節をつけて歌っておられたが、ヴァイシユナヴァ・チャランに、「こんな具合に歌ってみたら」とおっしゃって——キールタン歌手の真似をなさった。

ヴァイシユナヴァ・チャランはまた歌った——

ドウルガーの名を常にとなえよ

聖なるドウルガーのほかに

我を救うものはなし

ドウルガーの名の舟

信仰の湖に漕ぎ出し

この世の大海を渡るなり

慈悲深きグルの教えを修めつつ

舟は彼岸にたどり着く

風の姿で六つの敵が

六つの敵——色欲、怒り、貪欲、高慢、嫉妬、愛着

舟の廻りに嵐を巻き起こすと言うのなら  
嵐のなかでも、ドウルガーの名の舟は

たどり着くから安心せよ

不死なるお方シヴァが舵を取っておられるのだから――

マーよ、あなたは天国、あなたは地上、あなたは冥府(地下の国)

ハリ、ブラフマー、十二のゴパールもすべてはあなたの手よりなる

十変相も、十化身も、すべてはあなたなり

いざ今は、如何なる相にても我を救い給え

動くもの、動かぬものもあなた

粗きもの、細きものもあなた

創り、保ち、壊すのはあなた

大宇宙の根源なるあなた

あなた、三界の御母よ、三界の救い主よ

すべての力はあなたなり

マーよ、あなたの力もあなたなり

タクールは歌い手といっしょになって、この歌の次の一節を、繰り返し、繰り返し、おうたいになつた――。

動くもの、動かぬものもあなた  
粗あぢきもの、細こまかきものもあなた

創り、保ち、壊すのはあなた

大宇宙の根源なるあなた

あなた、三界の御母おんよ、三界の救い主よ

すべての力はあなたなり

マーよ、あなたの力もあなたなり

- (訳註3) 十変相(ダシヤ・マハーヴィディヤ)――ドゥルガーがとる十の姿 ①カーリー ②ターラー ③トリ  
プラスンダリー(ショーダシー) ④フヴァネーシユワリー ⑤チンナマスター ⑥バイラヴィー ⑦ドゥマーヴァ  
ティー ⑧バガラムキー ⑨マータンギー ⑩カマラ。
- (訳註4) 十化身(ダシヤ・アヴァターラ)――ヴィシヌヌ神の十の化身 ①魚(マツヤ) ②亀(タールマ) ③猪(ヴィ  
ラーハ) ④人獅子(ヌリシンハ) ⑤矮人こびと(ヴァーマナ) ⑥バラシユラーマ ⑦ラーマ ⑧クリシユナ ⑨仏陀  
(ブッダ) ⑩カルキ。



キールタン歌手は、また別の歌をうたいはじめた――

大気、暗闇、虚空、天空

そして、地の四方八方が、マーの光を受けて生まれ出る

ブラフマー、ヴィシヌなど、あらゆる神々も

すべてマーのシャクテイの光から生まれた

イダー、ピンガラー、スシユムナー、ヴァジュリニー、チトラー(訳註5)はすべて

サハスラーラのために脈打っている

蓮の花々はチトラーの中で上に向かって並んでいる

白色と金色に輝くもの

ふたつの蓮が開き、ひとつはまだ蓄つぼみだ

二組は上向きに、また下向きに

マーは白鳥のお姿で

蓮の中をクンダリニーとして動かれる

へその上のチャクラはマニプーラと呼ばれる

そこには十弁の血の如き紅あかき蓮

この蓮には、マーの火の力が宿る

この火が消えると、すべては消滅してしまふ

胸の蓮には、空のような心の湖

そこにアナハタの蓮が浮かぶ

そこには黄金に輝く十二弁の蓮の形をしたシヴァの矢

その蓮の中、マーのシャクティは生命の源、息吹として住み給う

その上の喉の中には、煙色の十六のヴィシュツダの蓮

その蓮の中で、マーのシャクティは空(エーテル)として存在している

そこに至れば、エーテルのすべてがひとつの無限の空間になる

その上の大脳には、千の花弁の蓮

(訳註5) 体内にはブラーナ(気)の流れる主要な経路が三本あり、特に重要なのがスシユムナーでブラフマ・ナー(訳註5) デイイとも呼ばれ、肛門と生殖器の間の会陰部にあるムーラダーラ・チャクラから頭頂にある梵の座(ブラフマ・ランドラ)にかけて脊柱の中を通っている。このスシユムナーの周りをイダーとピンガラーの二つの経路が交差しながら流れており、梵の座でスシユムナーに合流する。イダーは左の鼻孔の流れで、陰性、女性原理、月の性質を持ち、ピンガラーは右の鼻孔の流れで、陽性、男性原理、太陽の性質を持つ。スシユムナーの中にヴァジュリニーと言う細い経路が通っており、このヴァジュリニーの中にさらに細いチトラーと言う経路が通っている。スシユムナーにはチャクラと呼ばれるエネルギーセンターがあり、特有の花弁と色で表現される。

これはグルの最も神聖な場所

この蓮の内に、至高のシヴァは宇宙のお姿でいらつしやる

この白い千弁の蓮に、シヴァはひとりて住み給う

この蓮のなか、シヴァの姿は影のお姿

シヴァは梵の座(アラフマ・ランドラ)に、その影像を投じる

そして、そこにマーが至れば、シヴァは本来のお姿をとられる

そしてシヴァと共に真我を樂しむ

マーの遊び戯れが終われば

純粹精神なるシヴァと一体となる

### ヴィジャイたちと——有形の神、無形の神についての話——砂糖の山

ケダルと数人のものが立ち上がった——帰るつもりだろう。ケダルはタクールに礼をして、「では、おいとまいたします」と申し上げた。

聖ラーマクリシュナ「お前、アダルにあいさつしないで帰るつもりかい？ 失礼に当たらないかね？」(訳註——ケダルはバラモンだが、アダルは低いカーストに属しているので、彼といっしょに食事をしたり、彼の家でものを食べたりすることは、習慣上、禁じられている。それで、だまって帰ろうとしたわけである)

ケダル「神が喜び給うとき、世界は喜ぶ。あなた様がおいでになる場所には、すべてのものがあるということになります。ですが、少し気分がよくなって——。(子供たちの)結婚のときに困るので、周囲に少しは気をつかわなければなりませんし——。社会の目もありますし——。一度ゴタゴタいたしまして——」

ヴィジヤイ「でも、この御方をここに残して行くということは——」

ちやうどそのとき、タクールを食事に案内しようとしてアダルが入ってきた。奥の方に用意してあるのだ。タクールは立ち上がってヴィジヤイとケダルに声をかけられた。「さあ、わたしといっしょに行こう」そして、ヴィジヤイもケダルも、他の信者たちも、タクールといっしょに食事の席に坐って夕食の接待をうけた。

食後、タクールは再び応接間に戻ってお坐りになった。ケダル、ヴィジヤイもタクールをとりまいて坐った。

〔ケダルの懇願と許しを請うこと——ヴィジヤイ、神の姿を見る〕

ケダルは合掌して、非常にいいねいな態度でタクールに申し上げる——「お許し下さいませ。ここで食事をするのをためらったりいたしまして——」

タクールが食事なさるところで、自分ができないわけがあるのか、ということに気が付いたのであろう。

現在、ケダルの勤務先はダツカにある。その任地で、彼を仰慕する人たちが菓子、その他の食物をさかんに持つてきて賜るらしい。ケダルはそんな話をして、タクールのご指示を乞うた。

ケダル「(うやうやしい態度で) 主よ、あちらで、人々が私のところへ沢山食べものを持つてきてくれるのでございますが、どうしたらよろしゅうございますか」

聖ラーマクリシユナ「神の信者であれば、不可触賤民の持つてきた食物でも食べて差支えない。七年間、神に狂った境涯を過ごした後で、郷里クニに行った。その当時はほんとに何ともかとも言いようのない境涯だったよ。売春婦までがわたしに食べさせてくれたっけ！ でも今は、そんなことはできないがね」

ケダルはいとまを告げるに先だつて、低い声でこう申し上げた。「主よ、どうぞ力をお授け下さいませ。大勢の人が私のところに来るのでございます。それなのに、私はいったい何を知っているというのでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「大丈夫だよ！ 心の底から神さまを信じていれば、万事うまくいくよ」

ケダルがお別れする前に、バンガヴァアシー(ベンガル語の新聞)の編集者であるヨーゲンドラ氏が入つてきて、タクールに礼をしてから席についた。

有形の神、シヤカル、無形の神ニラーカールについての話題になった。

聖ラーマクリシユナ「あの御方は、有形の神でもあるし、無形の神でもあるし、その上どんなに様々すがたな相をしていなさることか、とても、とても、わたし等にはわかりっこないさ！ ただ、形がない、

とだけ言えるわけはないだろう？」

ヨーゲンドラ「そこがブラフマ協会の呆れたところ（あき）でしてね！ あそこでは十二才の少年といえども、神を無形と見る！ アーデイ協会（ブラフマ協会の一分派）では、それほど有形の神に反対はしません。相当の家で行われる祭礼（アヅマ）なら、出席してもいいことになっていくらしいです」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハッ、この人はうまいことを言うね。十二の少年でも、無形の神を見る。だとさ」

アダル「シヴァナートさんは、有形（シヤカル）の神を信じていませんね」

ヴィジャイ「あれは、あの人の考え違いですよ。タクールがおっしゃるように、カメレオンは時によつてはこの色になったりあの色になったりする。樹の下にずっといる人だけが、どういう動物か正しく知っているのです。私は深い瞑想をしているうちに、ドウルガー祭（アヅマ）で使う女神像の背景画（チャールチットロ）のようなものが見えた。沢山の神々がいて、いろんなことを言っておられた。私は自分に言いかけました。さあ、タクルのところへ行つて教えていただこう、と」（訳註、チャールチットロ—ドウルガー祭（アヅマ）のときに女神像の背後を飾るドウルガーの様々な物語を描いた背景画）

聖ラーマクリシュナ「お前は正しいものを見たんだよ」

ケダル「信者たちのために神は形を現すのです。神の愛によつて、信者は神の形を見るのです。ドルヴァ（インド神話の聖者）が自分の信じている神の姿を見たとき、『なぜ耳飾りを動かさないのだろう？』と言った。すると神は、『お前が動かせば動くよ！』とおっしゃいました」

聖ラーマクリシュナ「みんな、認めなけりや——無形の神も、有形の神も、みんな認めなけりやいけない。カーリー堂で瞑想していたら、売春婦の姿が見えた！ わたしは、『大実母よ、こういう姿にもなるんだね！』と言ったよ。だからわたしは、すべてのものを受け入れる、と言っているのさ。あの御方が、何時いつ、どんな形で現れなさるのか、わたしにはわからないんだよ」  
こうおっしゃって、タクールはお歌いになる——

乞食がおいでなすったよ

神の想いにかがやく顔で——

ヴィジャイ「神は無限の力です。どんな形にでもなれないことはないでしょう？ 何とも驚くべきことです。われわれはみな、全体かみから見れば塵の一片ひとかけにすぎないのに、神はこうだ、などと言い切るので。おかしいことです！」

聖ラーマクリシュナ「人はほんのちよつと、ギターやバーガヴァタやヴェーダーンタを勉強して、自分はすっかりわかったなぞと思っている！ 砂糖の山に一匹の蟻が行った。一粒食べて満腹してしまった。もう一かけら口にくわえて巢に運んでいく途中、こう思った——こんど来て、この山全部持っていくよう！」（一同笑う）